NEWS LETTER

短期大学基準協会
ASSOCIATION FOR ADVANCEMENT OF COLLEGES IN JAPAN

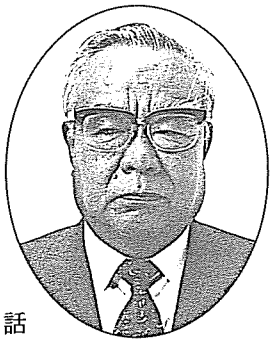
VOL.12　平成11年7月

〒102-0073
東京都千代田区九段北4-2-25(私学会館別館内)
TEL03-3261-3594　FAX03-3261-8954
編集・発行　短期大学基準協会

CONTENTS

●巻頭言　いま、大学に期待されるもの
●〈組み替え〉議論順不同
●自己点検・評価から「相互評価」の道へ
●委員会から

巻頭言　いま、大学に期待されるもの



川　並　弘　昭

短期大学基準協会理事
聖徳大学短期大学部
理事長・学長

大学生の学力水準の低下が問題になっている。特に新入生の基礎学力を懸念する声が高い。ゼミで英文テキストを使えば授業が成り立たない。それどころか、分数や小数の計算間違いが目立ってきたとの指摘もある。3×{5＋(4－1)×2}－5×(6－4÷2)＝という計算を、いわゆる有名大学の経済系学部一年生で数学受験しなかった学生の二割が解けなかったという。国語力の低下もしばしば耳にする。おそらく地理や歴史や理科の基礎学力もダウンしているであろう。このようなことでは大学は高等の教育どころではなく、自らに固有の教育以前に高校の勉強はもちろん、義務教育レベルの算数や国語等のおさらいをすることが必要となろう。事実、文部省の調査では、1997年度に「補習授業」を実施した大学は国立で67校、私立では164校に上がっている。

しかし、大学生の基礎学力低下は、「補習」や「FD」等の方法で解決することはおそらく困難であろう。多様化、弾力化の名の下に現在展開されている、生徒の自由選択を尊重する教育改革路線そのものを再考することが必要となるのではなかろうか。ともあれ、大学は学力のある学生を育成するために、小学校から高校までの復習を引き受けることをも覚悟して、直ちに有効な基礎学力の向上策を考案し、その実行に取り掛からなければならないであろう。

ところで、講義中の私語が先生たちを悩ませている。当節の私語する学生の特徴は、注意をしてもあまり効き目がないことである。話したいから話すのであって、その行為が他人の迷惑になることには考え及んでいない。どうしてこのようなことになったのであろうか。原因は様々あると思うが、その主要なものに「個性重視」の教育を挙げることができよう。この原則を高く掲げたのは臨時教育審議会であったが、その後現在に至るまでの教育改革はこの視点から進められている。

その場合、「個性」とは各人に生来的な資質能力のことであり、それを重視することで従来の効率性優先の画一的で硬直的な教育を改革することができると考えられたのである。つまり、「個性重視」は方法上の原則であって、それ自体が教育の目的ではない。ここのところを取り違えると、私語する学生のように自己中心の考え方や行動しかできない人間が育てられることになる。

言うまでもなく、現在強く求められるのはそのような利己主義の人間ではない。他者の立場や利益をも同時に配慮できる人間である。権利を行使すると共に義務を履行し、自由を享受して放縦に流れず、行為の規範を承知してそれを実践できる有徳な人間である。大学は今や学力だけではなく、「心の面」においても充実した教育を行い、社会の期待に応えることを強く求められているが、このことは短大制度が創設されて以来、短大の特色として高く評価されてきたことだと思うが、この点をもう一度再確認して、短大教育の原点である人間教育に励みたいと思う。

・このNEWS LETTERは各短大に2部お送りしています。
関係部署等へ回覧方ご配慮をお願いいたします。

〈組み替え〉議論順不同

短期大学基準協会理事
栗　坪　良　樹（青山学院女子短期大学　学長）

二〇世紀が終わろうとする今日、〈戦後五〇年〉を過ごして次の五〇年に向かって歩き出そうとしている今日、日本はますます〈混沌〉を極めていると思います。政治、経済、社会状況はまるで〈猫の目〉のように変化し続けているというのが実感です。とりわけ私たちが守っている教育界も、初等中等教育から高等教育に至るまで、どこをとってもそれで良し、これで良しということがありません。そのさ中、〈学級崩壊〉〈学校崩壊〉ということばがまるで突然のように罷り通るようになりました。それより以前には〈家庭崩壊〉ということが言われていました。最近の子どもたちや若い人々の精神のあり方を〈崩れ〉という表現で論評する人もいます。日本中を占有するこの〈崩壊感覚〉は一体全体何なのだろうと考え込む日々が続きます。

それにしても学校を守ってゆくということは難儀だなと思う時、私は自らを励ますことも含めて同僚や学生たちに、〈混沌〉は度をこした混乱や混迷ではない、私たちが意図や意志を用いれば、その〈混沌〉から必ず形状が顕われるのだ、ということを確信しようと言い続けてきました。ここが大切なところで、まさに〈気〉を入れて、〈気合い〉をかけてことがらに当たるという意味の重さがあると思います。日常の混沌に馴染んでいるうちに、時として近視眼的自分に気付くことがあります。そのような時は、自分の視野をカメラを引くようにしてロング・ショットでことがらの全貌を見るということが問われてきます。

全体を、今まさに混沌とする日本の全ての状況を天の眼から見れば、それはどうしても通過しなくてはならぬ、いわば避けて通れぬ混沌状況に見えてきます。短期大学は生き延びられるかという現実的な問いかけから始まった高等教育の〈組み替え〉論は、今は短期大学のみならず四年制大学を含めて第二段階、第三段階の〈組み替え〉論の状況に入っているように見えます。おそらく、混沌状況が明確な形状を顕現してこれで良しという一定状況を見るまでは、試行錯誤の連続であって、マラソンにたとえれば、走りながら考え、考えながら走るといった姿を想うのが一番分かりやすいと思われます。考えることを中止した時、あるいは走り続けることを中止したとき、回転していた独楽が勢いを失って倒れる時のように、守ってきた学校が倒れる時だろうと思います。

今、日本中のあらゆる分野のシステムが、意志を用いて組み替えられていると認識すれば、教育界もその例外ではあり得ないという単純なことがらに行き着きます。〈リストラ〉ということばの重さが迫ってきます。このことばの響きは、常に切り捨て御免ということを前面に押し出してきました。経済、経営状況の四苦八苦が前面に立ち過ぎることによって、ことばの正しい意味における〈再構築〉、〈組み替え〉ということが後方に追いやられるという気味があり過ぎました。現にそういう状況があり続けていると思います。

教育界の問題、私たちの短期大学の問題に詰めて言えば、高等学校から高等教育へ進んでくる生徒が、二人に一人の状況になってきているという数値の問題があります。定員を確保するためには短期大学は、もはや推薦入試については全員が入学出来る状況が公認されることになってきました。これまでの入試選抜とは異なる選択方式の〈組み替え〉論が鼓吹されることになってきました。そのなりゆきや趨勢はもはやとどめることが出来ません。文字通り選択方式のリストラということに直面したことになります。選択した学生はモノではありませんから、迎え入れた結果の待遇の問題が次に大きな問題となります。学校でありますから教授するプログラムすなわちカリキュラムの問題が次に控えていることになります。カリキュラムのリストラが次に直面する問題となりました。カリキュラムの再構築は、大学という場所で行われる学問の再構築にまでその裾野を広げます。まさしく、各教員各研究者の自己点検、評価がものを言うことになってきました。大学人の〈意識改革〉ということが鼓吹されますが、それが制度改革に関わることに傾いている限りでは何ほどのことでもありません。問題は煎じ詰めれば、学生の全入化状況のさ中にあっても自分の学問は有効かということです。換言すれば、大衆化した不特定多数の能力に対しても分かるように教育可能かということになってきます。

ことがらは学生の能力の問題よりも教える側の能力の問題になってくるわけです。教員の資質のリストラということが問題になってきます。初等教育に携わる教員の35%の人が担任を降りたいとしているという数値が問題になったことがありました。今ごろの教員はだらしがないというような相変わらずの精神論がありました。しかしその数値の背後には、苦渋、苦痛の果て、試行錯誤の果ての本音が隠されていたこともまた事実であったと思います。個別性の激しい児童、生徒の輪の中に入り、悪戦苦闘の結果がその

数字だったと思いました。程度の差があるにしても大学教員もまた自分の資質の組み替えに直面しているということになります。意識改革の急務は、教える側の教壇の立ち方の問題に換言してもいいことになります。

折も折、高等教育の今後は三つのタイプに区分した考え方をもって棲み分けるのが良しという議論になってきました。高度の研究を目標とするもの、職業に直結するもの、教養を核とするもの、いわゆるエリート型、マス型、ユニバーサル型という分かりやすい指針が一般に流布されることになってきました。高等教育の棲み分け論、すなわち序列徹底論がここにあると思います。この論理が徹底すればするほど、いかなる場合にも短期大学は四年制大学の下部構造にあるということになってしまいます。短期大学の特質や特色とは別に制度が優先し、短期大学人の誇りや努力を疎んずることにもなってゆきます。

短期大学を卒業する学生たちの過半は、就職することが当り前になっています。例の分類でいえば職業に直結することを本旨としている短期大学ということになっています。これは四年制大学出身者においても同じことであるとすれば、学生を社会に送り出す側の私たちの社会意識の中身が問題になってきます。私は目下短期大学協会の就職問題委員会の委員長を務めています。各短大の就職担当の職員の方々や先生たちと運営委員会をもったり、研修会を共にしているその発言の中に、教員の就職に関する考え方の浅さが指摘されることがありました。学生が短期大学を出て就職することは間違いのない現実であるにもかかわらず、そのことを無視しているか無知であるか、学生の側に立つということをしないのは如何なることか、という議論です。

それとは別に、学生の〈就労意識〉の希薄さということもしばしば指摘されました。黙って過ごせばジリ貧になるので、様々に手をさしのべて就労意識を鼓舞しなければならないのが就職担当の方々の現実であるということでした。年々その度合が深まっているということでもあります。大学・短大の定員確保はその先に卒業後の進路すなわち過半を占める就職問題がその根本にあるということです。学生個人の就労意識の問題が大きく控えていることを教員は知っているかどうかということでもありました。二〇代の失業率や無業者志向の若い人々のことが話題になっていることと、高等教育機関の今後のあり方とは無関係ではないということでもあります。

あえて職業教育とは言わないにしても、組み替えられてゆく企業の現実、終身雇用・年功序列の論理がリストラされ続ける現実の中で、これから社会に出てゆく学生たちに、そうした国家的現実に眼を向けさせているかどうか、そこが試されているということになってきます。大学人の職業に関する考え方のリストラということにもなってゆきます。ともすると俗に言う〈親方日の丸〉式の考え方に安住してきた大学人によっては、学生ほどにも社会化していないということもあり得ることです。

各企業の人事の方々と出会って興味深い忠告を受けることがありました。やはり、学生の就労意識の希薄さということもありますが、忠告の中心に対人関係意識の希薄さ、あるいはコミュニケーションの低劣さということが目立っていました。ある企業の方は、単刀直入に、自分のことばを持つ学生を育ててほしい、ということについて力説していました。パソコンの技能や語学力などもさることながら、〈自分のことば〉をもって人と対話の出来る学生を送ってほしいということでありました。若い人々が、仲間うちで符牒のような言語を弄しているようなことは、しばしば見聞するところです。しかし、いったん公式の会話の場になるとそれが出来ない、ことばが出てこないということになってしまう。人事の人と電話をしたいのだが、どのように話せばいいか教えてほしいと言われるケースもしばしばであると就職担当の方々から聞くこともありました。

私たち大学人は、恐らく十重二十重のリストラ状況に包囲されているのだと思います。それは、教育界のことに限定することは出来ません。眼前のことを弥縫策でしのいでゆくことは、すでに限界を見てしまっているように思います。初等中等教育の現状を知らずして高等教育が成り立たないのは当然のこととして、高等学校の教育と大学の接続の問題を重要と考えるなら、社会に接続している高等教育であることについて、学生一人一人の意識に鮮烈な印象を残す学校であることが試されます。そのことをこれまで以上に強調する必要があると思われます。

私は、〈ことば〉に関わる教員を三〇年以上続けてきましたが、企業の方々に言われるまでもなく、若い人々が〈ことば〉を喪っていること、〈ことば〉を豊かにする勉強を怠っていることは厳然たる事実だと思います。そのことはまた別の機会に論じたいと思います。

自己点検・評価から「相互評価」の道へ

向上充実委員会委員
森　一貫（帝塚山短期大学　学長）

自己点検・評価の実行は難しい。帝塚山短期大学では平成三年から毎年実施しているが、それがこの二、三年マンネリ化してきている。方式は、教育課程、各専攻（日本文芸・英米語・日本文化史・家庭生活・食物栄養）ごとの教育活動、各委員会（学生部・教務部・図書館・専攻科・全学共通科目・入試広報・情報教育など）の活動、各教員の教育研究内容などの項目にしたがって、現状と課題と評価（解決策）の三点から分析してみようとするものである。

学内では毎年恒例のように三月頃から点検と評価を教職員によって始めるのであるが、報告書としてまとめるのが七月頃になってしまう。実は、ここで、その報告書にもとづいて、それをさらに討議すればよいのであるが、夏休みに入ってしまい、後期になると次年度の準備や入学試験業務に忙殺されてしまい、その余裕をとることができない。勿論、次年度の準備段階では各委員会や専攻会議などで、前年度の反省や課題解決という形で自己点検・評価が活かされているのであるが、全体として討論するに至っていないのである。したがって、自己点検・評価は報告書をつくるだけなのかというマンネリ心理が働きだしている。運営の責任者としては何とかその状況を打破したいと考えているのであるが、なかなかに実行できないでいる。

そうした折りの「相互評価」である。これにとびつかない手はない。他者の評価を刺激にして学内活性化へ結びつけることができる。ましてや他の短期大学の現状と課題を知ることができ、そこから学ぶことも大きいはずである。そう考えて今回の「相互評価」の対象校として名乗りをあげた。学内からは、学内のことだけをきっちりとすべきだという声が聞こえてきそうであったが、基準協会の向上充実委員会が音頭をとりながら、その委員の一人として実践しなければ名折れになるという気負いもあって手をあげた。

さて、その「相互評価」であるが相手校は広島文化短期大学である。坂田理事長・学長には日頃から多くを学ばせてもらっている。相手にとって不足はない。こんな思いで、本年三月、両校が相互訪問を行なった。前もって、過去五年間の両校の自己点検・評価報告書は交換してある。訪問の直前には相互に尋ねたいこと(学びたいこと)の項目もファックスで交換した。ちなみにその項目を以下に揚げてみよう。

広島文化短期大学から帝塚山短期大学への質問事項

① 貴学では、前学長古瀬先生の頃、平成３年に既に自己点検をなされていますが、何をヒントにして思いつかれたのでしょうか。
② 平成９年度の自己点検・評価では、「教養型短大を目指す」とありましたが、平成12年度に計画されている改組転換と何か関連する所がありましたら、差し支えない範囲でご教示下さい。
③ 編入学の比率が高いようですが、家政系学科では如何ですか。
④ 家政系学生で就職希望の学生に対しては、資格等についてはどの様に指導されていますか。
⑤ アドバイザー制度では、教員１人当たり何人程度の学生を担当されるのでしょうか。また、学生はアドバイザーを選べるのでしょうか。
⑥ 推薦入学で入試の翌翌日には合格発表されているが、処理の流れを参考にさせて頂きたい。
⑦ 出題期間が例えば10年度では、４日間でその内２日は土、日となってますが、学生確保の立場で特に問題とするようなことはありませんか。
⑧ 貴学の場合自己点検・評価報告書をどの範囲まで公開されていますか。
⑨ 情報教育研究委員会のなかで、嘱託職員(TA)1名を採用されていますが、この嘱託職員についてご教示下さい。
⑩ 家政系ではありませんが、文芸学科日本文化史専攻の卒業制作展の位置付け（単位との関連等）について、お伺いし参考にさせて頂きたい。
⑪ 食物栄養専攻における、食品科学コース、栄養士コースのコース分けの時期について。
⑫ 家庭生活専攻では、２年次から「食生活クラス」その他を設けていますが、カリキュラム等がありましたらお教え下さい。また、「クラス」の意味（位置付け・目的）はどのようにされていますか。

帝塚山短期大学から広島文化短期大学への質問事項

① 毎年のように見られる設置認可・変更届けについて（その経営理念）
② 生活科学科の経年比較・評価について
③ 「対話による教育」(基本方針）について（その実践例）
④ 学生自身の自己点検・評価について(その目的・方法)
⑤ 実践的職業教育について（検定試験の勉強会）
⑥ 就職と資格（例えば秘書士）について（その状況）
⑦ 専攻科の栄養士養成施設の認定について（この専攻科のみで栄養士の資格が得られるのか）
⑧ 栄養士研究会について
⑨ A・O入試について
⑩ 呉大学短期大学部について

このようにして相互訪問を行なった。訪問は実りが大きかった。どこがどのようにとは詳しく書ききれないが、「相互評価」の第一歩を果たしたと考えている。上記の両校の質問内容をみてもらえばわかるが、それぞれに学んでみようという姿勢を感じていただけるであろう。ただ、「相互評価」を行なうには一つの約束をした。これは決して両校のあらさがしではないのであるから、評価の実施は両校の自己点検・評価報告書にあらわれたものを材料としようという合意である。「相互評価」は今始まったばかりである。どのような評価がお互いに出来るのか、その内容をつくりあげる作業は現在継続中である。内容の発表にはもう少し時間がかかる。お待ち願いたい。

自己点検・評価の公表と他者評価

—向上充実委員会から—

有　馬　澄　子　（東横学園女子短期大学教授）

平成6年に短期大学基準協会は、自己点検・評価による改善支援を一つの目的として発足した。当時はなじみの薄かった自己点検・評価も『短期大学の自己点検・評価』の刊行とも相俟って、会員校の理解は高まり、平成10年調査では404校中330校（81.6%）が実施し、そのほとんどが自己点検・評価委員会を置いている。しかしながらこれを報告書に纏めているのは249校（75.5%）であり、さらに外部に公表しているのはわずか89校（27.0%）にすぎない。実施の努力は認められるとしても、ほぼ3／4校は、主観的・恣意的自己満足評価に終わっているといわれても仕方がない。自己点検・評価に客観性をもたせるには、まず外部公表は不可欠である。

さらに評価は、自己評価のみならず他者評価が必要なことはいうまでもない。国立大学では第三者機関による評価を義務づけ、私立大学では学外者検証を努力義務とした。向上充実委員会では、短期大学としての個性やすぐれた特色を伸ばすためには、学外者検証として相互評価を、第三者機関として短期大学基準協会を考え、委員校から早速、相互評価を始めている。相互評価の結果が当該校の質的向上に大きく寄与したことは明らかであるが、より評価の透明性を高め、社会の理解や支持を得るためには、どんな項目をどういう基準で評価したかの情報を提示して評価結果を公表する必要があろう。評価基準と指標の提示は、社会に対しては客観性を高め、相互評価を考えている会員校にとっては実施のガイドラインとして役立つのではないかと、率先して実施している委員校の評価実績を参考にすべく詳細な相互評価結果報告を期待している。

委員会から

「第一期高等教育資格」への道のり

—調査研究委員会から—

吉　本　圭　一　（九州大学　助教授）

先般、中教審の「初等中等教育と高等教育との接続の改善に関する小委員会」で意見報告の機会をえた。本調査研究委員会の活動を通して『短大ファーストステージ論』の執筆にも参加し、同書の視点も織り込んで報告した。私は、「高校（とくに専門高校など）と大学や職業との接続」の改革のための視点として、とくに「学校間の接続性」よりも「個人の一貫したキャリア形成」を重視すべきであると強調した。これまで、学部3年修了者の大学院進学や、専門学校からの大学への編入学など、制度間の風穴をあける政策が広範に展開された。これらは多様な学習経路の保証という意味で高く評価できる。しかし、結局のところ、声の大きい制度・機関の立場が徐々に認められていった面があり、しかも大学4年制を標準的な高等教育の尺度として、他の制度をそのモデルに当てはめて評価し続けているのではないだろうか。つまり、個々人が、非伝統的、例外的なキャリアを辿っていればいるほど、社会的な評価を得にくくなる。

この現状を打破し、高等教育の多様な系列をそれぞれに資格上の対等の位置づける、とくに準学士レベルでの表題の「第一期高等教育資格」という学習経験の節目を用意すべきではないだろうか。専門高校の専攻科のもつ困難を改善していくためのより大きな枠組みが必要と考えて、意見報告の場でもこの点を強調した。

ある審議会委員から、「資格」制度確立のために統一試験を行うべきかどうかを質問された。私は、まだ「第一期中等後教育資格」試験を国家試験的に実施することを検討するのは時期尚早で、むしろ学位授与機構を通しての対応の方がよいのではと答えておいた。

ところが、話しは変わるが、じつは私の勤務する九州大学教育学部でも、今後、短大の教育関係学科卒業者や他大学の学生等を3年次編入で受け入れようと企画している。いちばん頭を悩ましているのが、多様な学習経歴をもつ受験者の学力をどう評価すべきかというところだ。結局、どこかで「編入学用共通試験」を実施してくれると助かるなどと、ひとり呟いてみる。これも調査研究委員会の課題になるのではと考えている昨今である。

◆ 役員一覧 ◆

平成11年4月22日現在

会　長　佐久間　彊
千葉経済大学短期大学部　理事長

副会長　日下　晃
武庫川女子大学短期大学部　理事長・学長

〃　髙鳥正夫
東横学園女子短期大学　学長

理　事　浅井幹夫
北海道女子大学短期大学部　理事長・学長

〃　有馬　泉
中日本自動車短期大学　学長

〃　井内慶次郎
日本視聴覚教育協会　会長

〃　伊藤唯真
京都文教短期大学　学園長・学長

〃　上野一郎
産能短期大学　理事長

〃　大谷和雄
名古屋短期大学　理事長・学長

〃　川並弘昭
聖徳大学短期大学部　理事長・学長

〃　栗坪良樹
青山学院女子短期大学　学長

〃　小出忠孝
愛知学院大学短期大学部　学院長・学長

〃　坂田正二
広島文化短期大学　理事長・学長

〃　佐藤弘毅
目白学園女子短期大学　理事長・学長

〃　塩川利員
大阪青山短期大学　理事長・学長

〃　鈴木武夫
日本私立短期大学協会　事務局長

理　事　関口富左
郡山女子大学短期大学部　理事長・学長

〃　瀧川直昭
名古屋文理短期大学　理事長

〃　舘　昭
学位授与機構　教授

〃　谷本貞人
関西外国語大学短期大学部　理事長・学長

〃　戸田修三
日本私立学校振興・共済事業団　理事長

〃　西村駿一
別府大学短期大学部　理事長・学長

〃　春山志郎
元東京工業高等専門学校長

〃　平方昇一
明和学園短期大学　理事長・学長

〃　松田紹典
聖和学園短期大学　理事長・学長

〃　松田英毅
作陽短期大学　理事長・学長

〃　村崎正人
徳島文理大学短期大学部　理事長

〃　山内昭人
香蘭女子短期大学　理事長

〃　和野内崇弘
札幌国際大学短期大学部　理事長・学長

監　事　出田憲二
熊本音楽短期大学　理事長・学長

〃　嘉悦康人
嘉悦女子短期大学　理事長・学長

（五十音順　敬称略）

◆ 短期高等教育研究会委員一覧 ◆

平成11年4月22日現在

委員長　髙鳥正夫
東横学園女子短期大学　学長

井内慶次郎
日本視聴覚教育協会　会長

上野一郎
産能短期大学　理事長

岡本祐次
三重短期大学　教授

川並弘昭
聖徳大学短期大学部　理事長・学長

日下　晃
武庫川女子大学短期大学部　理事長・学長

小出忠孝
愛知学院大学短期大学部　学院長・学長

坂田正二
広島文化短期大学　理事長・学長

佐藤弘毅
目白学園女子短期大学　理事長・学長

清水一彦
筑波大学　教授

瀧川直昭
名古屋文理短期大学　理事長

舘　昭
学位授与機構　教授

戸田修三
日本私立学校振興・共済事業団　理事長

春山志郎
元東京工業高等専門学校長

（五十音順　敬称略）

編集後記

大学を取り巻く環境は大きく変化しています。その一つが教育への個性重視の導入です。横並び教育を抜けだそうとして、教育界はまさに混沌とした状況となっています。その中で法則を見付け、独自性を生かすことが、私学に求められているのでしょう。

もう一つの難しい課題は情報の公開です。自己点検・評価報告書を外部に公表することは実行しがたいかもしれません。しかし、これを公表することは、独自性を主張する私学の務めでしょう。

森本　晴生（東京文化短期大学　理事長）